

令和6年度 第3回横須賀市学力向上推進委員会 議事録

- 1 日時 令和7年1月7日（水）15時00分から16時30分まで
- 2 場所 横須賀市役所 302 会議室
- 3 出席委員
笠原委員・石井委員・新田委員・庭田委員・高橋委員・村上委員・小日向委員
- 4 事務局
学校教育部教育指導課 鈴木課長 石橋主査指導主事 渡辺主査指導主事
黒澤指導主事 北井指導主事
- 5 傍聴者 なし
- 6 会議内容

（1）事務局からの報告

事務局から、横須賀市教育課程実践検証協力校事業において、モデル校となった4校の公開授業に向けた取組について報告し、質疑応答を行った。

■委員長

今回も積極的にご意見をいただき、事務局の目指す学力向上の取組に反映させていきたい。12月25日に文部科学省から二つの諮問が出された。内容は、教育課程の基準等の在り方と多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策の二つである。この二つの諮問が同時に出了れたことは、次の時代がどういう時代になり、学習指導要領をどのように変えていくかを示していると思っている。また、その諮問の中に「デジタルの力でリアルな学びを支える」という言葉がキーワードとして挙げられ、ICTの活用が非常に強く打ち出されている。今の学習指導要領から次の学習指導要領へ、どのような改訂を行い、何に重点を置きながら日本の教育が進んでいくかということが見えてきた。しかしながら、学校現場に足を運ぶと、その理想のような形に

まだまだ追いついていない状況が見受けられる。今後も地道な取組の中で、どうやって確かな学力を子どもたちに身に付けさせるのかということは、学校にとって重要な課題である。本日の協議は家庭との連携のあり方とICT端末を持ち帰ることによって、どのように教育内容を充実させていくことができるかに焦点が当てられるだろう。今後の横須賀市の取組に少しでも寄与するような意見をいただけるとありがたい。

では、教育課程実践検証協力校の取組と成果について、事務局から報告をお願いします。

■事務局

これまでの学力向上推進委員会で学力向上のためには、教員の授業改善と授業力向上が不可欠であるという意見をいただいたことから、本事業が構築されてきた経緯がある。これまで本市で行ってきた、学校を指定し、特定分野を重点的に校内研究で取り組むフロンティア研究事業と、全教員が年2回、自分の専門とする教科の研究に取り組む教育課程研究会とを組み合わせる事業である。これまでのフロンティア研究は時間と費用をかけたわりに公開授業の参加者が少ないという課題があった。また、従来の教育課程研究会は授業のスペシャリストの発表や個人研究に偏りがちで学校全体への取り組みにつながっていないという課題があった。本事業は、学校の校内研究を通じて各教科等の教育課程の底上げを図るものとして新たな教育課程研究会の形を作り、令和8年度から全市で一斉にスタートさせるものである。そのため、令和6年度と7年度にモデル校を設置して事業の検証を行っている。

モデル校は、桜小学校・浦賀小学校、池上中学校・長沢中学校にお願いしており、全ての学校が今年度中の公開授業を終えたところである。どの学校においても学校研究の中で、職員全体で学校の教育目標を具体的な子どもの姿と結び付けて、研究を進めている。これまでの成果として、特定の個人ではなく職員全体の授業力の底上げにつながっていると教育委員会として成果を捉えている。

次に、各校の具体的な取組をご紹介します。桜小学校は、総則をテーマに学校の教育目標などから9つの具体的な力を設定し、学びの場面の子どもたちの姿

を、具体的にイメージして実践を重ねてきた。この9つの力を教員はもちろん理解しているが、児童ともそのイメージを共有していることは桜小学校の大きな特徴である。公開授業は、生活科、国語、特別活動が実施された。どの授業も、学校として大切にしている9つの力を授業で具現化するとどうなるのかが主眼におかれ、授業が行われた。今後は、9つの力のつながりをカリキュラムと結び付け、よりよい桜小の教育課程を目指していくことが確認されていた。

浦賀小学校は、学校教育目標や子どもたちの実態から「学びの中で人との関わりを楽しむ子どもの育成」を研究テーマとした。このテーマに至るまで「子どもの見取りを語る会」として注目児童の変容を職員間で肩肘をはらず対話する会が設けられ、浦賀小の子どもの実態を明らかにしていったことが大きな特徴である。当日の国語の公開授業では、人との関わりを大切にした学び合いの授業がどの学年でも実践され、子どもたちの姿を通して、学びを語る先生方の様子が見られた。

今後の展望として、「学びの中で人との関わりを楽しむ子どもの育成」は、国語科のみで行うことではないため、研究を他教科に広げるなど、カリキュラム全体で、子どもたちの資質・能力を育成していくことを考えている。

長沢中学校では、総則をテーマに、学校教育目標である、「命一杯に生きる～深く考え行動する生徒～」を具現化するため、『生徒』を主語にした学校づくり」というテーマで研究に取り組んでいる。

まず、グランドデザインを共通理解し、学校教育目標の「命一杯に生きる」生徒像と「深く考え行動する生徒」を達成した生徒の姿を教員一人一人が説明できるようにするため、年度当初に研修を行った。そして、目標や生徒像を、より具体的にし、その姿を日々の教育活動の中で実現していくことを確認した。

また、今年の重点目標を、昨年度の反省と生徒の実態から「探究力」と「コミュニケーション能力」の育成とした。そして、校務分掌を整理し、4つのプロジェクトで学校教育目標を達成することとした。そのプロジェクトはNAGASAWAの頭文字をとって、「NGSWプロジェクト」と呼んでいる。4つのプロジェクトは、Nが話し合い活動、Gが長沢スタンダード、Sが総合、Wが行事を示しており、それぞれのプロジェクトには、リーダーを置き、常に各

セクションの達成状況を振り返り、学校教育目標の達成に向けて、より効果的な連携を模索しながら取り組みを進めている。また、目標や各プロジェクトは生徒と共有し、教員とともに達成に向けて日々取り組んでいる。また、長沢中学校は、生徒の話し合い活動をベースにして、全ての教育活動を行っている。授業も行事も生徒主体で進め、教師が主導することを極力減らしている。各プロジェクトの課題や修正点は、その都度出てくるので、その度にプロジェクト会議を開催し、目標を達成のために軌道修正を行っている。

池上中学校では、外国語でモデル校を依頼している。これは、指定された教科だけが研究に取り組むのではなく、学校全体で校内研究に取り組む中で、外国語が代表で授業公開を行うということである。

池上中学校では、学校教育目標である、「人を大切にする学校」を具現化するために、「子どもたちが主体的に学びたくなる授業づくり～子どもと一緒に授業づくりを楽しむ教師～」をテーマに研究に取り組んでいる。研究を始めるにあたって、生徒の実態を分析して、目指す生徒像や資質・能力を明確にし、研究テーマを設定した。そのテーマのもと、教員が各教科等の視点をもって授業改善に臨み、その結果を共有しながら研究を進めている。

また、前年度の研究の反省を踏まえて、教師の役割についても考察している。その中で、教員は「教える人」から「学ぶ楽しさを感じさせる人」という再定義を行った。授業の活動が、教員がやりやすい順序や、やらせたことの順序になっていないかを意識して単元構想を練り、教科会で検討し、授業に臨んでいる。

このように、モデル校のどの学校も、学校と教員が大切にしていることを共有し、実践されている。また、自校の子どもことや授業のことを熱心に語る様子が、公開授業だけでなく、多くの場面で見られた。こういった様子からも、研究で目指す子どもの具体的な姿を職員間で共有していく過程が大切であり、これからの教育課程研究会でも改めて重視していきたいことと再確認している。

さらに、教育課程研究会として重視している協議の場面の運営についても、来校された先生も含め、多くの方が意欲的に話し合い参加されていた。この点

も大きな成果である。一方で、当日の授業を見ただけでは、学校全体の底上げになっていることが参加者に理解されず、これまでの教育課程研究会との違いが分からないといった声や、学校として大切にしていることが伝わらず、協議中の議論が深まりづらい場面も見られた。それらが今後の課題点であると捉えている。

各校の成果については後ほど、村上委員、小日向委員からも直接伺いたいが、事務局としては公開授業の授業者だけでなく、学校全体の授業力の向上につながっていると成果を捉えている。報告は以上である。

■委員長

質問がないようであれば、村上委員と小日向委員に、それぞれの学校の取組から得られた手応えや今後の展望等についてお話をいただきたい。

■村上委員

本校では11月27日に先程報告にあった授業公開を行った。その後、校内で研究の中間反省を行った。校内の多くの教員が、桜小学校で目指す力を具体的な姿で共有することができ、職員間で子どもを語る時の共通言語ができたことや、授業に向かう時の迷いが無くなったということを感じており、そのことがモデル校で研究をしてきた成果であると感じている。

研究主任としてさらに嬉しかったことは、授業場面だけではなく、例えば職員会議で運動会の種目について協議している時や次年度の行事のねらいを考える時などに、その根拠として研究で示した目指す9つの力をもとに職員が提案を行っていることである。全員で学校教育目標を実現させようとする意識が高まっているのを感じる。次年度に向けても、教頭を中心に9つの力とリンクさせる必要感を感じながらカリキュラムの見直しを行っている。今後も校内の様々な行事への取組やそれに向けた会議なども、9つの力を中心にしてスムーズに行うことができると期待している。

■小日向委員

先程、事務局からは「一回の公開授業を観ただけでは学校全体の授業力の底上げになったかは参観者には伝わらなかったのではないか」という報告があった。そのことについて、本校の公開授業は外国語であり、参観者には、他校から多くの外国語の担当教員が多く集まったが、本校の他教科の教員が協議会の中で積極的に本校が目指す授業やこれまでの研究成果を積極的に語っている様子をみると、研究によって教員集団がずいぶん変わってきたという印象を受けた。教科に関わらず、自分の教科ではこうしていると、自分事として授業改善について語ることができていた。また、他校から参加した教員や外国語以外を担当する教員も同じように授業改善の話ができていたと感じている。

実際の校内研究では、大学教授がアドバイザーとして来校して授業を参観しており、客観的に我々の授業を観て評価をいただいている。そのことが、多くの教員の学びになっている。本校では、これまで6回研究授業を行ったが、毎回の授業の中でアドバイザーがその授業の成果と次の授業者へ意識するポイントについてのアドバイスをくれるので毎回の研究授業がステップアップになっている。このように、本校では教科に関わらず、校内研究の中でバトンパスをするように授業改善に取り組んでいる状況である。

■委員長

昨年度、本委員会が提出した答申の中で、学力向上のためには授業力の向上が不可欠であると示しており、先ほどの事務局の報告にあったように教育課程研究会の取組もそれを受けて実施方法や内容を変更しているものである。

本日は、家庭との連携が協議題となっているので、石井委員にも感想を伺いたい。保護者からすると、校内研究や公開授業などは具体的なイメージが湧きづらいのではないか。

■石井委員

確かに、具体的なことはイメージできないし、各校の教員が自分の得意分野だけでなく他の教科にも時間を使い、授業について研究をしているということは、保護者のほとんどは知らないのではないか。しかし、そうやって教員が授業づくりを研究しているということを、少しでも家庭に発信すると、学校や教員の見方も変わってくる保護者がでてくるのではないかと感じた。

■委員長

おっしゃる通りである。校内研究などは時間的な制約の部分もあり、保護者や地域の方に参加を呼び掛けることは難しいと思うが、学校運営協議会の委員などに、新たな家庭と地域との連携という視点から参加を呼び掛けることも重要になってくるだろう。

今回のモデル校の研究と保護者連携について、小日向委員や村上委員に意見を伺いたい。

■小日向委員

今回の授業公開では、そのような呼び掛けは行えていなかった。しかし、そのような呼び掛けは今後必要性になってくるだろう。それは、保護者に学校の様子や授業がまだまだ伝わっていないと感じるからである。これまで保護者が受けてきた教育と今の教育は全く違ってきているため、保護者の当たり前が当たり前でなくなっている。例えば面談では、各教科の評定について、現在は、目標に準拠した評価であり、根拠をもとに評定をつけているにもかかわらず、テストの平均点を出してほしいという相対評価と勘違いしているような相談があり、保護者に今の学校教育を理解していただけていないと感じることがある。学力観なども過去に保護者が受けてきた教育とは違ってきているため、今後も発信が必要と感じた。

■村上委員

本校では、11月から12月にかけて保護者を対象に学校評価アンケートを行った。その結果の中で本校が目指す9つの力について、保護者の認知が低いということが、課題として分かってきた。そのため、12月に行われた個人面談では、子どもたちが特別活動で作成するキャリアパスポートを活用した。キャリアパスポートの作成では、子どもたちが9つの力の中で、どの力が高まったかを自己評価している。それを、子どもと教員が共有するだけでなく、個人面談で保護者とも共有を図った。5月の自己認識の段階から、12月の段階では、どのようなことが成長したと本人が感じているかを保護者と一緒に確認すると、保護者もすごく安心していた。保護者が知らなかった、児童が学校で頑張っている一面を知ることにもつながった。このようなフィードバックを続けながら、保護者と教員とが向き合うような関係ではなく、保護者と教員とが横並びで子どもの背中を見て、同じゴールを一緒に見て支えていけるような関係を作りたいと考えている。

■委員長

これまでの各委員からの話は、今日の協議につながるものである。保護者からすると学校が目指しているものは見えにくい。学校からのお便りは行事のお知らせや生活の上で留意すること等の基本的な内容が多い。しかしながら、学校として取り組んでいることや教員が頑張っていること、どのように学校を変えようとしているのかという実態を伝えていくことも重要なことである。また、それをどのような方法で、いかに上手に伝えていくかということもまた大切にしなければならないということが、各委員の意見から伝わってきた。

また、今回の事務局の報告について、私は、村上委員の桜小学校の公開授業を参観し、助言を行ったが、桜小学校の各教員は自分たちの授業が学校全体に関わっていることを感じている。また、自分たちが行う教育活動が学校経営の中に位置付けられ、役割を果たしていることを理解している。学校教育目標を具現化することは、学校教育にとって根幹に関わる研究であったことを協議会の中で、私からは話をした。一貫したテーマで大変まとまりのある研究協議会

になっていた。

総則の必要性を十分に感じていない教員もいるかもしれないが、桜小学校の教員は、学校経営に全ての教員が関わっているという意識に変わっていったことは、先程の村上委員の職員会議での事例からも分かるだろう。

報告事項は以上とし、協議にうつる。

(2) 協議

事務局が、地域や家庭との連携に係る資料を示し、①家庭・地域と学力向上推進プランの目標を共有するためにできることは何か。②学力を向上させるために家庭・地域と連携してどのような取組ができるか。という二点について協議を行った。

■委員長

事務局から協議に関連する資料について説明をお願いしたい。

■事務局

資料1は、全国学力・学習状況調査の質問紙調査の中で、家庭や地域に関する質問の数値をまとめたものである。本市と全国の児童生徒の回答を比較している。特徴的な質問について説明する。質問17は学校以外で一日どのくらい勉強しているかという質問である。本市の小学校6年生の家庭での学習時間は、全国平均を下回っている。一方で、中学校3年生は全国平均を上回る学習時間になっていた。質問5は、一日どのくらいテレビゲームや携帯のゲーム、スマートフォンなどを使用しているかという質問である。この質問に関して、小・中学校ともに全国よりもかなり多い使用時間となっていた。

地域との関わりに関する質問については、横須賀市の学習状況調査において独自質問調査を行っており、その回答の割合を載せている。地域と関連する質

問については、令和４年度に学校運営協議会を設置したため、その効果について検証するために作った質問である。令和４年度から６年度にかけて小・中学校ともに地域の方と話をする機会が増えていると実感している。これは、コロナウイルス感染症に対する社会の対応の変化もあり、一概には学校運営協議会を設置した影響であるとは言えないだろう。しかし、地域とのつながりを感じる児童生徒が増えてきていることは確かである。

資料２は、家庭学習啓発リーフレットである。Ａ４両面刷りで作成しており、現在、毎年４月に小学校２・３・５年生の保護者に対して学校を通じて配付している。

資料３は新１年生の保護者に配付しているリーフレットである。配付時期は小学校の学校説明会の時期にしている。年明けから学校説明会があるため、今後入稿して、配付を行うことになる。

資料２の家庭学習啓発リーフレットについては、今年度末に入稿して、次年度の４月に学校へ送付となるため、本日、各委員からの意見を参考にして内容の刷新を考えている。横須賀市が掲げる学力向上推進プランにあった内容のリーフレットにしていきたい。また、先ほど委員長の冒頭のあいさつにあったように、今後、本市ではＩＣＴ端末の持ち帰りなども行っていく予定である。リーフレットの内容には、そのような内容についても記載が必要になってくると考えている。

資料４は、学校運営協議会だよりである。昨年１２月に行った学校運営協議会情報交換会という会合の資料として作成・配付したものである。全市内で学校運営協議会のことについて情報共有する機会が乏しいため、このような冊子を作っている。

他には参考までに、過去に配付していた家庭学習啓発リーフレットを参考資料としてお配りしている。

■委員長

協議題としては事務局から二つ議題が示されている。この協議題の二つはそ

れぞれつながっている部分があるので、特に分けて協議は行わないこととする。また、事務局からは、資料2の家庭学習啓発リーフレットの内容の見直しやICT端末の持ち帰りという話があった。それらに焦点を置いて協議を進めていきたい。

では、資料2の家庭学習啓発リーフレットについて、学力向上推進プランで目指すものを家庭と共有するためにどのように改善するか、さらには学習指導要領が求めているものを、今後共有していくためにどのような内容にすればよいか各委員からは意見をいただきたい。その前に事務局としては、このリーフレットをどのような意図で作成したのか、工夫した点など伺いたい。

■事務局

過去に配付をしたリーフレットも資料としてつけているので、現在のリーフレットと比較しながら内容を見ていただきたい。

就学前の新1年生の保護者に配付するリーフレットについて、以前のものは入学までに、子どもにこんなことを身につけさせてほしいというメッセージが強かった。例えば、自分の名前を書けるようにしておくことや書き順も一緒に覚えておくとういといった内容である。それについて、事務局内では保護者の方にも、子どもたちにも学びに対するプレッシャーを感じさせるような印象を受けてしまうのではないかという意見があった。そのため、現在のリーフレットは幼稚園教育要領に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい十の姿」と、普段の子どもたちの生活や遊びを重ね合わせながら、幼児期の生活や遊びが小学校での学びとつながっていることをイメージしてもらえるように、また、保護者の子どもとの関わりや声かけも併せてイメージできるように内容を作り変え、表面はイラストで見やすくし、裏面の「子どもの学びを見つめる」という部分に具体的や思いを込めて文章を記述した。

小学生用のリーフレットは、小学校2・3・5年生に配付している。配付対象を、この学年にしているのは、低・中・高学年を意識しているからである。1年生に関しては、先ほど説明したリーフレットが配られているため、低学年

は2年生に配付している。そして、中学年になる3年生でもう一度改めて家庭学習を啓発するために配付し、高学年になった5年生のスタートで、再度配付している。過去には中学生用のリーフレットがあったが、小学校の間に3回配付しているため、現在は中学生用は配付していない。

小学生用のリーフレットの作成にあたっては、過去のリーフレットで大切にしてきたことを踏襲し、デザインを整えて見やすくすることから始めた。就学前のリーフレットは大きく作り変えたが、小学生用の内容は過去のリーフレットのものをほとんど引き継いでいる。一部の内容について、例えばテストの結果や宿題をやったかどうかといった結果そのものを保護者が一喜一憂するのではなく、子どもの取り組みに着目して、励ましたり褒めたりしてほしいという記述に変更し、子どもとの関わり方が大切であることを強調した。しかし、保護者は教員ではないので、プロセスを大切にしましょうと言っても、なかなか伝わらないため、子どもの作品やテストなどの成果物などへの関わり方についても記述をした。

しかし、これらは現在の学力向上推進プランを意識して作られたものではない。先ほど話題になったように、どのような学びを大切にしているのか、市としてどのように学力を捉え、それをどう向上させようと考えているのかが、保護者に伝わるように改善したいと考えている。ぜひ、ご意見をいただきたい。

■委員長

今の事務局のリーフレットの作成の経緯や意図を聞いて、意見を伺いたい。

■庭田委員

まず、教員の立場からリーフレットを観ると、大事な内容がちりばめられていると感じる。しかし、保護者の立場になって考えると、家庭でじっくりこのリーフレットを読むかという、それは難しいだろうと感じる。今の家庭は忙しい方が多い。私も学校から様々なお便りを出す、読まれずに電話で問い合

わせがくることがある。それだけ、お便りは読まれないことや文字だけだと理解していただけないことが多い。教員としては非常に魅力的なリーフレットなのだが、情報量が多いと感じる。しかし、作成の意図などを伺うと、全部伝えたい内容であることも否めないため、各校がどのタイミングで、どの順番で伝えていくか、これをどう活用するのかを考えることも重要だと感じる。

例えば資料2の右側の「生活習慣を大切に」「学習環境を豊かに」という部分など年度当初に確認が必要である。また、左側の「家庭学習への取り組みせ方」というところは、夏前の個人面談等で、子どもの具体的な成果物等を一緒に見ながら話をしていくことが効果的であろう。担任と一緒に話をしながら、学校での声かけの内容を伝え、家庭ではどのように声をかけてほしいかというような具体的な話をしながらリーフレットを活用すると、価値が高まるだろう。

資料3の就学前の保護者用リーフレットは、この良さがどれだけ保護者の方に伝わっているのかということが気になる。例えば、イラストの吹き出しにある「本当だね。美味しそうだね。」という保護者の発言は、この「ね」という言葉に共感の思いが込められている。こういった共感する姿勢があるからこそ、子どもは自分の思いを伝えようとするのである。また「ハト、何羽いるんだろう？」という問い返しから、普段の会話から数の感覚を子どもにつけさせられることを伝えている。こういったことが、このイラストからどれだけ保護者に伝えられるかと思ったところである。

先ほどのモデル校の実践報告の中でも、子どもの実態を共有しながら、育成を目指す資質・能力を共通言語にして話し合うことの重要性が確認された。教員と保護者の間での共通言語がどれだけ作れるのか、その素材に家庭学習啓発リーフレットはなり得ると考える。リーフレットを事務局が作成するならば、学校はそれを各校の実態に合わせてどう活用していくかを考える必要があると思っている。

■委員長

たくさんのヒントをいただいた。リーフレットを作って終わりでないことは事務局も分かっているとは思いますが、学校も今の庭田委員の発言にあったよう

な、どのように活用をしてきたのかということには課題があったのだと思う。他にはいかがか。

■高橋委員

庭田委員の意見を伺い、配って終わりにするのではなく、生活の部分は年度当初に確認し、学習に関する部分は面談等で、子どもの具体的な成果や困り感等が出てきたところで保護者と一緒に確認するのは名案だと感じた。

一方で家庭との連携について難しさも感じた。「生活習慣を大切に」という部分は保護者として、これを否定したり、疑問を感じたりする方はいないだろう。しかし、「学習環境を豊かに」という部分に関しては、家庭によっては、これらの言葉を受け止めることが本当に厳しい家庭もあるだろう。例えば、ある片親の家庭は、朝早くから保護者が仕事に行き、子どもが起きた時にはもうすでに家には誰もおらず、欠席連絡すらも子ども自身が行っている。そのような家庭では、子どもが学校に行っているかも保護者は知らないことがある。逆に、子どもが帰ってきた時に「お帰りなさい」と保護者が待っていてくれるような家庭のほうが今は稀有な存在になってきている。ましてや「さあ、勉強しよう」と保護者が声かけする家庭などはむしろ珍しいのではないかと思う。他にも保護者に面談を依頼しても仕事があつて勤務時間内には行けないと断れられることもある。このような実態の中で、子どもたちの家庭学習を見てあげることや、自主勉強を褒めて励ますというような余裕のある保護者が実際にどれだけいるのかと思った。もちろんそのような家庭がないわけではない。家庭によってはもっと宿題を出してほしいと要望される方もいる。一方で、家庭学習として出される宿題の量が多すぎて取り組めないと言われる方もいる。中にはそれが原因で不登校になる子もいる。

今のリーフレットだと、保護者が見守ることが前提の内容になっている。その前提が揺らいでいる家庭が少なからずあるということを考えると、家庭で見守ることや褒めて励ますようなことを保護者にお願いすることは難しく、家庭学習を啓発していくためには、先ほどのご提案のあった二者面談や三者面談の時に活用して、家庭での学習について考えていただくきっかけや担任として家

庭学習の取り組み方を提案していくようなことができるのではないかと思います。

■委員長

これまでの意見では、内容は重要なことが書かれており、面談の時に活用できるという案が出ている。また、家庭と共有したい大切なことを繰り返し伝えていくことには価値があり、リーフレットの内容が子どものことを語る上での共通言語になり得るのではないかという意見もあった。実際に担任をしている村上委員、小日向委員の意見を伺いたい。

■村上委員

先程、発言した本校の9つの力というのは、子どもたちの資質・能力に関することで、保護者と共にどう伸ばしていきたいかということで面談の際に話しやすい内容であった。家庭の状況は、先ほどの高橋委員の発言にあったように大きく二極化している現状がある。家庭の生活習慣や家庭学習のことを話題にすることは、保護者が子どもに対してしてあげたいけど、できていないということ突きつけるような形になり、話にくいことがある。また、その子どもの担任が二年続くと家庭の状況がよく分かってきている状況の中で、話題にすることすら難しいと思うことがある。リーフレットに書いてあることは大切なことだと思うが、例えばリーフレットの内容を示し、この中で今一番、家庭で意識していることはどんなことかを聞くなど、ポジティブな内容で活用することはできるかもしれないと思った。また、客観的に事前に子どもたちにアンケートを取っておいて、学年の集団として傾向を伝えて自分の子どもや家庭のことを考えるきっかけを作るなど、一手間加えることも考えられる。リーフレットをそのまま示しても、家庭での生活習慣や学習習慣に課題のある家庭にとって、この内容は難しく伝わらないように思う。

■小日向委員

自分の息子が小学生なので、保護者の立場から話を聞いていた。これまでの話を聞いていても、自分の家でできていないと思うことがあった。家庭での学習を観ることができていないことがあると感じたからである。しかし、教員をしていると、もっと厳しい家庭があるということも認識しており、二極化ということが身に染みて伝わった。家庭の中で子どもの学習に寄り添う時間がとれない保護者にとっては、このリーフレットの内容は、参考にするにはレベルが高く、よく見ないで終わることもあったと感じた。

そういった保護者に向けては、例えばリーフレットの内容を今の小学校で行っている教育内容を紹介するといった程度にして、家庭での取組については、できる時にお願いする程度のものに留めるものにするのはどうか。また、そのお願いも全部ができなくてもよいと伝えたり、最低限のものとしたりするような配慮があると、先ほど伝えたような保護者は安心するだろう。

家庭学習では、特に自主学習を家庭にお願いされると困ることがある。自分の子も苦勞して自主学習に取り組んでおり、保護者としてそれをサポートしているが、自主学習が返却された際の担任のコメントには、できていない点が多く指摘されており、どんなことに取り組ませればよいのか難しさを感じ、親としてサポートが足りなかったからなのかと落ち込むことがある。

資料3については、保護者には参考になると感じた。自分が母親として子どもにどんな声をかけたらいいのかは、とても悩むことがある。この資料では、子どもの言葉も保護者の言葉も同じ吹き出しに書いてあるが、保護者として知りたいのは、自分は子どもにどういう言葉をかけるべきかということである。例えば、子どもが何かを見つけた時には、子どもが言った言葉を繰り返して共感するのがよいことや、子どもが疑問に思ったことに保護者がすぐ答えるのではなく、数や言葉に興味をもたせるチャンスだと捉えて、子どもに問い返すなど、保護者の言葉にフォーカスにすると、さらに保護者に共感してもらうことができる資料になると感じた。

■委員長

では、次に石井委員にご発言いただきたい。横須賀市の現状としては、家庭の二極化という状況があるというお話をこれまでにいただいた。家庭での取組ということについては、横須賀市PTA協議会でも熱心に取り組まれてきたと思う。保護者の立場から、教育委員会からこのような資料が配られていることについて、これまでの各委員の発言についての感想なども含めながら、お話しいただきたい。

■石井委員

横須賀市PTA協議会でも、保護者向けの広報誌を作成して発行している。しかし、それがどれだけ家庭で見られているかは、正直疑問に思っている。そこで、夏休み前に発行した、夏休み中の家庭での過ごし方を特集した広報誌では、事務局と相談して紙面に二次元コードをつけ、見たことに対してアンケートをいただくこととした。その集計はまだ行っていないが、今後、どれだけの方から反応があったか確認するつもりである。

広報誌などは、文字数が多いと、忙しい保護者は見ることを敬遠する。文字数は少なくして、イラストを入れるなど、私たちもそういう工夫をしている。学校からの配付物が多くある中で、保護者がこのような資料をじっくり読むということ自体が、とても難しいことのように感じる。また、これらをWEB上だけで発信するのも、効果的ではないと思っている。マチコミで情報を流したり、ホームページ上にアップしたりして、見ていただくようお願いしても、さらに見なくなると思うので、こういう紙媒体で周知していくことは必要だと思う。

そこで考えられるのが、情報共有の場を設けるということである。例えば地域の方も含めて、学力向上推進プランの詳細や、目指す目標というのを対面で説明する機会を作り、教育委員会からの発信だけではなく、双方向で議論し、意見をいただく機会を作るのはどうかと考えた。情報共有の場があれば、作成したものを見ていただけることにもなる。さらに、その情報共有したことについて、アンケートや意見をいただくことも大切である。働き方改革の考え方から、教員の地域イベントへの参加には制限があるのだろうが、地域のイベント

などで、こういったリーフレットを配付して、たくさんの大人や子どもに見てもらうことなどが考えられる。

他に有効なのは、今回、横須賀市PTA協議会が行ったように、紙とデジタルツールを併用していくことである。紙での周知に加えて、ホームページやSNSで発信をしたり、先ほどの二次元コードでアンケートを行ったりすることである。また、読んでいただいた方に何かを差し上げるということとはできないと思うが、何かしらのリアクションを求めてみることもできるだろう。それにより、どれだけの人に読んでもらったのかも分かるのではないか。そういったデジタルツールと併用した形で周知していくことが有効であるように感じた。

■新田委員

資料2を見た時に、以前、自分の子どもの音読を家で聞いていたことを思い出した。それと同時に家に帰ってきた子どもに学習に向かわせるのも難しかったことを思い出した。

この資料が作られた頃の背景には、学力向上には家庭学習が必要だという前提があったのだろう。しかし、この内容をよく読むと子育て全般の課題にもつながってくる。また、幼保小の連携の課題にもつながってくる。遊ぶこと自体が学びであるという幼児期の学びの理解ということにもつながっている。

他にも教育委員会は「よこすかスマホ・SNSスタンダード」というリーフレットも作成している。保護者にとっては、入学時や進学時にたくさんのプリントが配られる中で、それぞれがばらばらに配付するのではなく、子育てに関することが、平易な言葉でまとめて書いてある一冊のハンドブックのようにしてあっても良いのではないか。行政の役割分担で縦割りになっている、保護者からすると子育ては、分けて行われるものではない。

資料3からは、幼児期の関わりが学力そのものに大きく影響しているということ強く感じた。資料で示されているような子どもとの関わりは、就学前教育施設の保育士や幼稚園教諭、園長先生などがされていることなのだろう。保

護者であれば、このような関わりは、非常に興味をもってもらえるものだと感じた。

いずれにせよ、これらの資料を用いて、これからの時代においてどのような学力が求められているのかを伝えていく必要があると感じる。もちろん、教員がそのような学力を語れることが大前提である。さらに、保護者に向けては、学習指導要領の言葉そのものではなく、保護者に分かる言葉で、さらには横須賀市の保護者や子どもをイメージして言葉を選び、伝えていかなければ、読んでもらえるものにはならないだろう。

また、最近感じているのは、地域の方や保護者は、自分の受けてきた教育のイメージが強く残っていて、自分の原体験で教育を語っているということである。今の学びや学力は、その時とは大きく変わっているということを、はっきりと伝えていく必要があるだろう。そのようなことが伝えられる資料になれば良いと思っている。

■委員長

私は、資料2を拝見した時に『家庭学習のすすめ』というタイトルが気になった。これまで考えられてきた家庭学習の目的と、これから必要とされる家庭学習の目的は、果たして同じなのかということを疑問に思ったからである。つまり、これまでの家庭学習は、いわゆる「読み書き」や「計算」などであり、漢字や計算問題を繰り返し行うことや音読などが家庭で取り組む学習であるという大きな概念ができあがっていた。そのようなことも、大事なことはあるが、「読み書き」や「計算」ばかりを家庭で取り組むよう焦点を当てていくと、今求められている学びや学力との乖離が、さらに進行してしまうのではないかという懸念をもっている。

先ほど、小日向委員が発言されたように、家庭に次から次へ何かを依頼するのではなく、今学校がどういうことに力を入れて取り組んでいるのかや、これからの子どもが社会を生きていく時には、こんな資質・能力が重要なのだというようなメッセージが載せられたらよいのではないか。また、その際に注意す

べきこととして、網羅的に全部載せようとしなないことである。つい教員や教育委員会の立場の方は全ての内容を入れようとしてしまう。しかし、そうすると、どれも中途半端になってしまう。

冒頭で話したように、次の学習指導要領の改訂においてはＩＣＴツールの活用は大変重要になる。「デジタルの力でリアルな学びを支える」という構想を、すでに文部科学省がかかげている。それを学校と家庭でどう実現するかという視点で考えると、ＩＣＴ端末の持ち帰りで何ができるのかということも考えていかねばならないだろう。

例えば、低学年なら、「写真の機能を使って自分の大事にしているものを撮ってみよう」といった、ＩＣＴ端末に触れることから始めるような課題が考えられる。音読も端末を活用したものや保護者の確認もＩＣＴ端末を使うことができるだろう。このようなＩＣＴ端末がこれまでの「読み書き」や「計算」に置き換えられていくという気がしている。ＩＣＴ端末であれば、今までとは違うやり方や違った発想が出てくるかもしれない。

教育委員会として家庭学習という従来の概念を取り払って、家庭に何を求めようとしているかということはこの機会に整理する必要があるだろう。

これまでも各委員の意見からは、資料で示された内容は大事なことが、配付のみで実現を目指すことは難しいということが確認され、これまでと同様の内容とするならば、資料を学校が保護者面談の時に活用できるようなものにしていくことなどの提案があった。また、家庭に伝えたいのは、今学校として何を大事にして、どういうことに注力しながら教育が行われているのかということであり、そういったことを教育委員会が発信してもらえると、学校も背中を押してもらえていると感じるだろう。二者択一とする必要はないが、作成した資料を家庭に突きつけるような形にはしてほしくないというのが、各委員の発言の中にはあったと認識している。

さらに、内容と違う議論もあった。どのように資料を提供していくかということである。提供の仕方は、各学校が工夫をしていく必要があるだろうし、石井委員の発言にあったように関係機関と連携して情報共有を図る機会を作ること重要である。資料を配付することについて、どのような思いを込めている

かを発信し、受信者と発信者の双方向の取り組みとして、そこで意見をいただき、それを次年度にいかしていくこともできる。各委員からは、たくさんの示唆をいただいた。

この他のことで、事務局から委員に質問はあるか。

■事務局

今後、I C T端末を児童生徒が自宅に持ち帰るようになっていくことが考えられる。現在、市内ではモデル校として数校の学校がI C T端末の持ち帰りを実施している。今後、それらの学校からの報告を受けて、成果や課題を整理し、全市で実施していくようになる。

各委員には、I C T端末を持ち帰らせた場合、どのような学習や家庭との連携ができるのか伺いたい。また、I C T端末は文房具であるという意見もあり、紙やペンと同様に持っていることが当たり前だとも考えている。持ち帰ったから、何かに使わなければならないという考え自体が、そもそも間違っているのではないかと考えている。I C T端末の持ち帰りについて、様々な意見をいただきたい。

■石井委員

I C T端末の持ち帰りについては、多くの保護者から様々な意見が寄せられている。ある保護者の方は、I C T端末を持ち帰ってきて、家で授業が受けられるような状態になると、学校に行かなくてよいと考える家庭もでてきてしまうのではないかということ言われていた。また、家庭に持ち帰ると家のW i - F i に接続することになる。様々な動画や画像を見ることになり、セキュリティも含めて様々なトラブルに巻き込まれる不安もある。家庭にパソコンがない家だってあるだろう。このようなことからI C T端末の持ち帰りについては、あまり良いことのように思えない。

他にも、ある学校のPTAからはICT端末の破損について相談があった。ICT端末の使用については、事前に使用許可承諾書などを書くことになっているかと思うが、その相談の際にも、どこまでが家庭負担なのか、故意ではなかったのかという話があった。持ち帰ると、そのような修理の話も多くなるだろう。コロナウイルス感染症対策のための一斉休校のような有事の際の持ち帰りは考えられるが、学校に通いながら子どもたちと教員がコミュニケーションが取れ、子どももお互い顔を見合わせて授業を受け、友達と遊べるという状況があるのであれば、ICT端末を家庭に持ち帰る必要性はないと思うのが、一個人としての意見である。

■新田委員

ICT端末を導入する時に個別最適な学びにつながるという文部科学省の話があった。今の宿題と言われるものは、全員同じ課題が出されている。学習に課題を抱えている子どもからすると、皆と同じ課題が出されてもできないことがある。しかし、ICT端末を使って、アプリケーションを使えば、その子自身が自分の学習記録を見ることができたり、その子が取り組むことができる課題を選択することができたりする。ICT端末は、宿題に取り組むものというより、その子が家庭で学習するためのツールになる。いろんな学習アプリを使って、自分のやりたい学習を計画的にやるということができるのである。レポートの作業もリアルタイムで更新され、記録されていく。一人一人の学びが、ICT端末の中に入っていくというように考えている。

そのようにICT端末を使うことを考えると、苦行のようにこなしていく宿題から、それぞれが考え、友達とアドバイスし合いながら自立していくことができるのではないかと考える。その支援をするのが教師である。そして、その支援が40人いたら40通りあるということだ。

しかし、ICT端末の活用で不安に感じていることもある。石井委員の発言にあったようなトラブルも考えられるが、学校に行けない子や教室に入れないような子が対面で教員とオンラインでつながれることである。先生と話すのが苦手に感じていたり、みんなとつながることが苦手だから学校に行けなくな

ったりしている子が、オンラインだと一瞬でつながってしまう。また、教員もオンラインだから気軽につながろうとしてしまう。そのようなことも怖さであると感じている。

■高橋委員

先ほどの委員長がおっしゃっていたように、家庭学習の概念を変えていく必要がある。また、教員も家庭学習の概念を変えて、家庭学習そのものを単元計画の中に位置づけることも考えていくこともできるだろう。例えば、単元計画の中で、授業の時間内で結論が出ないような課題をあらかじめ想定していた場合は、その課題を家庭で考えてくるようにして、次の時間は考えてきたこと共有することからスタートするというように、これまでの「読み書き」「計算」といった学習のようなものではなく、授業の延長というように家庭学習を捉え直していくのである。家庭学習は家庭でやる、保護者が見守り褒めるものということではなく、学校の学習の一環やその続きの学習を家で行うと捉え直す。そして、単元計画の中に家庭で学習してきたことを共有する時間というものを最初から位置づけるという発想がこれからは必要だろう。これからは学校は学校で、家庭は家庭でというように学びを分けて考えるのではなく、一つのものと捉えて、もちろん家庭で学習している子どもの姿を保護者には見守ってほしいが、基本的には児童生徒が自分で目的意識を持って取り組めば、授業でその成果を回収し、評価もできることだと思っている。また、そういった家庭での取組は自己調整する力として教員も評価していくと児童生徒や保護者に伝えていけばよい。このようにして、主体的に学ぶ力を育む一環として、教員は家庭学習を捉え直していったほしい。

これまでのような漢字を100字書く、繰り返し計算するといった学習を否定するわけではないが、ある意味、苦行と表現されるような我慢しながら頑張る家庭学習と、全国学力・学習状況調査で問われているような力とは全く質が違うものである。そもそも今問われている学力にあった家庭学習にすべきだし、主体的に学ぶ一環の中にあるものを家庭で学習すべきである。そうすると、そこには定着を目的とした繰り返し練習も、もちろん入るだろうし、次の授業のアイデアをまとめてくる、もしくは授業でやったことの発展として何かを考えてくる学習も考えられるだろう。時間がかかるような課題については、夏休

みなどの長期休みの期間を使うことも考えられる。そういう家庭学習を含めた単元計画を考える発想が教員には必要である。

資料2については、家庭学習の定義が宿題と自主学習となっており、この宿題が学校からも出されるものと記述されている。このように記載している時点で、宿題はもう受け身に取り組むものと定義していることになっている。そのように伝えるのではなく、家庭で学習することは「あなたにとって、学んだことを定着させるために必要なことだよね」という学習することの意義を子どもと繰り返し確認し「あなたが力をつけるために、自分自身で取り組んでほしい」ということを伝える必要があるだろう。そういう宿題であれば取り組む意義を子どもは感じるだろうし、「次の授業でみんなに考えを聞きたいから、考えをまとめてきて」というような宿題であれば子どもにとっても意味のあるものになる。そのような宿題を、ICT端末を使って集めたり、全体で共有したりするのであれば、端末の持ち帰りも家庭学習の取り組みもつながり、ダイナミックな学びになっていくだろう。そうすれば家庭に負担をかけるという発想もなくなるのではないか。教員自身がその宿題という家庭学習を再定義することが必要であることを強く感じた。

■庭田委員

小学生のICT端末の持ち帰りに限定して話をすると、ICT端末を持ち帰るのは、自分できちんとICT端末を扱えることが大前提になると思う。個人的な感覚としては、4年生以下は取り扱いが難しいのではないかと考えている。ICT端末を持ち帰っても使い方が分からなかったり、関係のない動画やホームページを見てしまったりするようなトラブルを想定してしまう。ICT端末の使い方や学習の目的が分かっている子どもに持ち帰りをさせないと余計なトラブルを生み出しかねない。

他には、高橋委員からあった家庭学習の再定義ということだが、保護者にもその学びの意図や経緯等も伝えていく必要があるだろう。資料2に記載のある自主学習の例の中に「料理をしてレシピにまとめる」というものがある。例えば、これを保護者に伝えたと、これが学習なのかという反応が多く返ってくる

と予想される。しかし、教員としては実体験を子どもが自分でまとめ、表現をするという立派な学びであるということを説明しなければならない。それと同じように授業の延長でICT端末を持ち帰ることも、それまでの学習の経緯や持ち帰るにあたって子どもとやり取りをしたことを保護者に説明をした上で、持ち帰らないと色々な弊害が起きてしまうのではないかと考える。

一方で、ICT端末の持ち帰りについての啓発や理解がある程度進む段階まで待ってから一斉に持ち帰るようにすると時間がかかってしまうだろう。このことは、いつまでも待ってはられない状況であると思うので、今回議論したリーフレット等を活用するなどして、ICT端末の持ち帰りの意図やその効果等を説明、周知する機会を作る必要があるだろう。その際も家庭と学校だけではなく、地域やPTAの力を借りていくと効果的であると考えている。

■委員長

委員の皆様から、貴重なご意見を伺えた。情報提供になるが、文部科学省のホームページの中に、リーディングDXスクールというページがある。先ほど石井委員の発言にあったような、様々な不安感やそれに対するQ&A、また、実際の取り組みの実践例などが多数掲載されている。そのことから考えると、全国的には、ICT端末の持ち帰りは当たり前になっていて、それを前提にして教育についての議論をしていかねばならないということである。持ち帰る、持ち帰らないという議論はもう遅いのである。ICT端末が当たり前のように子どもたちの周りであることを前提にして、これからの学校教育は成り立っていく。教員はそのような時代に足を踏み出しているのである。今回議論した家庭学習も、各委員が語っていたように、今がどのような時代にあるのかということに目を向けて考える必要がある。

また、高橋委員の最後の発言にあった、家庭学習を単元計画の中に位置づけるということは、コロナウイルス感染症対策の一斉休校時に、いくつかの学校が行っていた。みんなが家庭で勉強したことをどうやって学校再開後に学校の授業につなげるかということを考え、取り組んでいたはずである。しかし、通常の学校生活に戻ってしまったら、その時のことが過去の出来事になってしま

って、家庭での学習に何を求めていたのか忘れてしまっている。すでに学校としても取り組んでいたことがたくさんあるはずである。

家庭学習については事務局が今回の議論を整理して、リーフレットの内容をどのように修正し、どのように発信をしていくのか考えてほしい。

以上で、本日の協議を終了する。

令和6年度

第3回 横須賀市

学力向上推進委員会

●令和7年（2025年）1月7日（火）

●横須賀市役所 302 会議室

【次第】

- 1 開会
- 2 教育指導課長あいさつ
- 3 報告
教育課程実践検証協力校の取組について
- 4 協議

〈協議事項〉

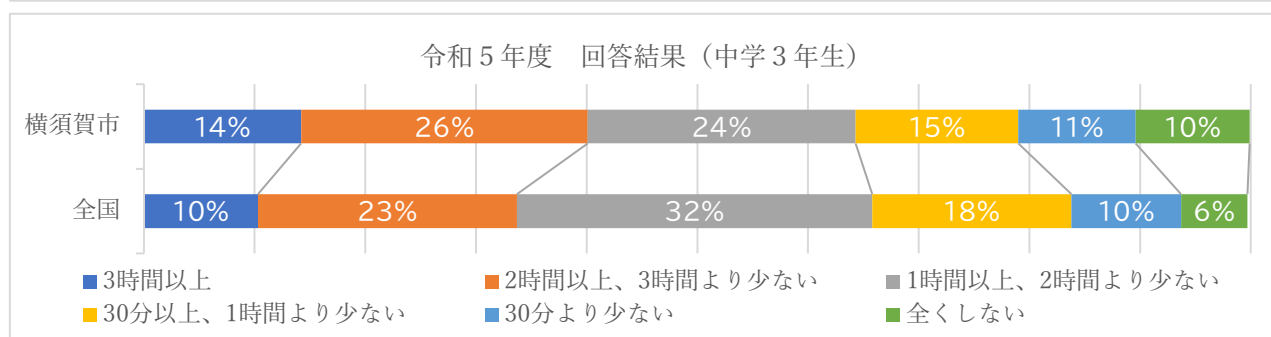
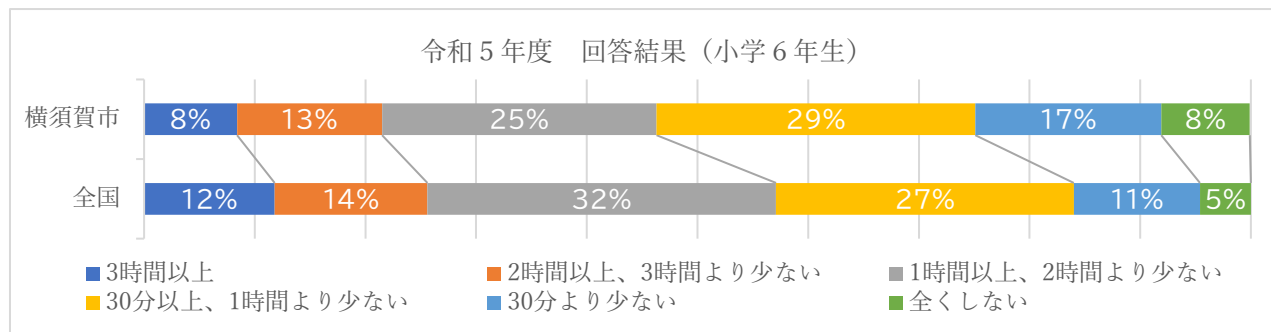
- ①家庭・地域と学力向上推進プランの目標を共有するためにできることは何か。
- ②学力を向上させるために家庭・地域と連携してどのような取組ができるか。

資料1～4

- 5 連絡
- 7 閉会

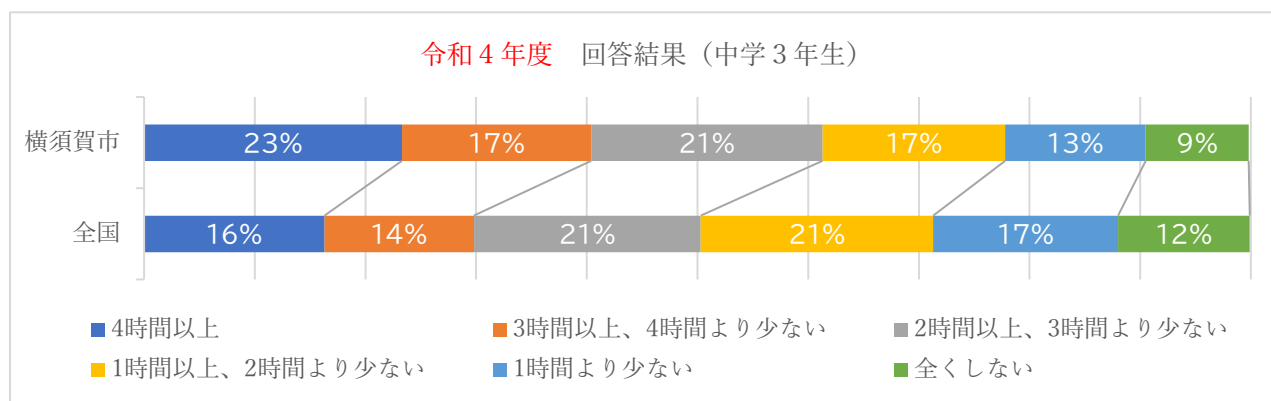
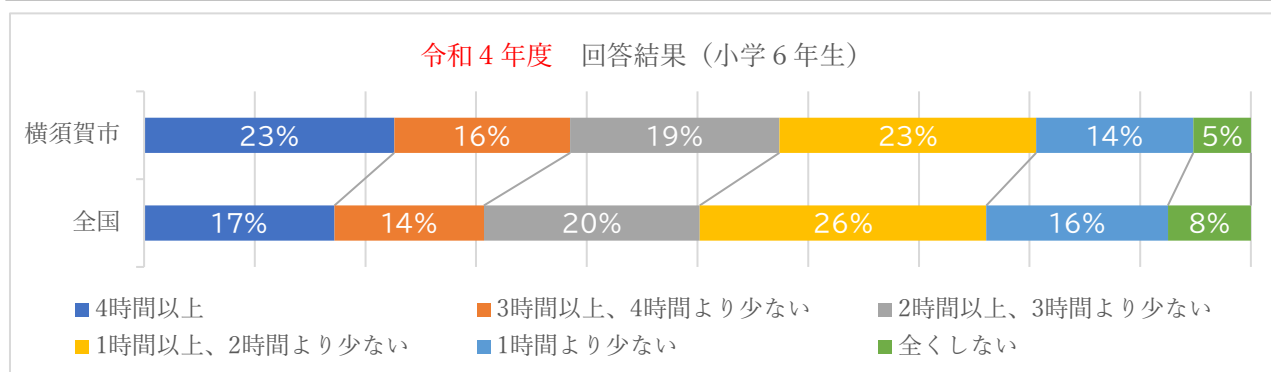
家庭や地域に関する全国学力・学習状況調査の関連数値（全国平均との比較）

質問紙 17（中 17）学校の授業以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしていますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）



※下記質問については令和 5 年度には実施されなかったため令和 4 年度の質問と結果を参照

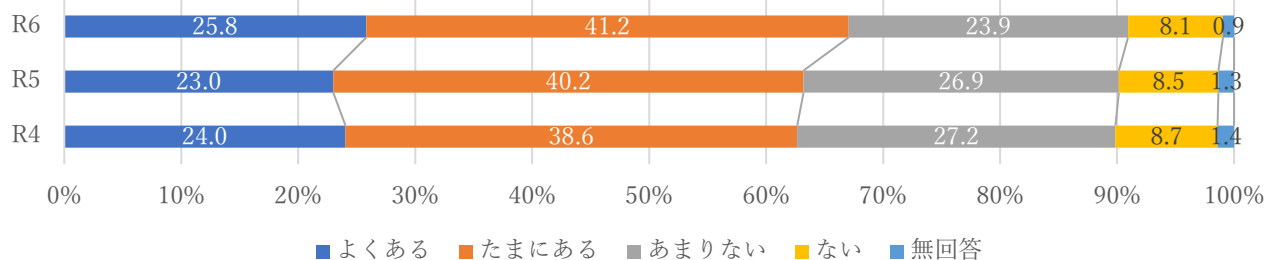
質問紙 5（中 5）普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピューターゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか



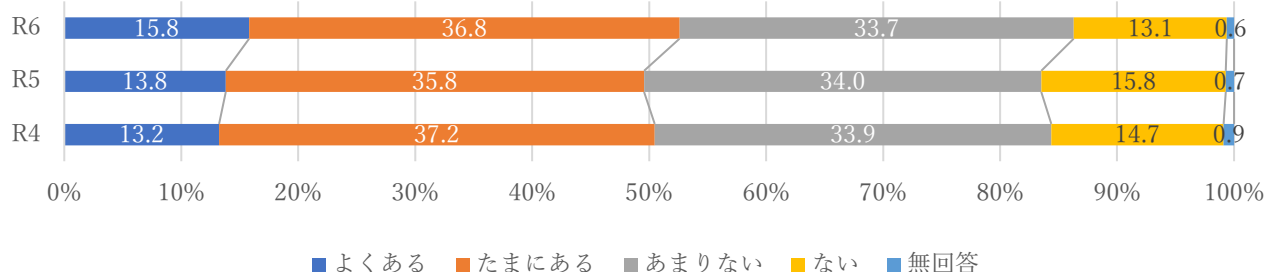
横須賀市立小・中学校学習状況調査の地域への意識についての独自意識調査の経年変化

地域の人と関わったり、話をしたりする機会がありますか

【小学5年生】地域の人と関わったり、話をしたりする機会がありますか

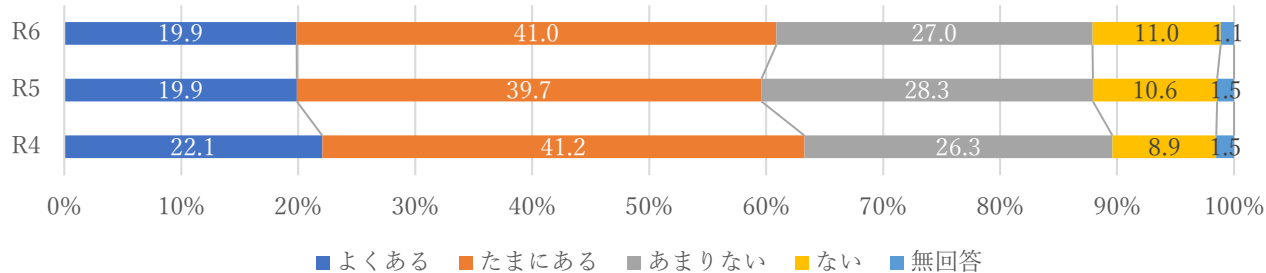


【中学2年生】地域の人と関わったり、話をしたりする機会がありますか

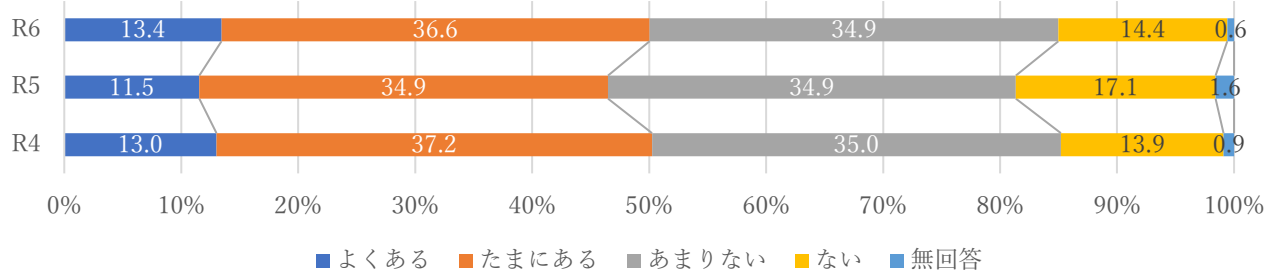


地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか

【小学5年生】地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか



【中学2年生】地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか





家庭学習に取り組むことは、
自分から学ぼうとする姿勢を育てます。

横須賀市 家庭学習啓発リーフレット(小学校版)

裏面のような生活習慣を整えるのも、
大切なことです。

家庭学習

家庭学習には、
宿題と自主学習があります。

宿題

学校から出されるものです。
初めに必ず取り組みます。

自主学習

子どもが自分で課題を
見付けて学習するものです。

自主学習で取り組むとよいもの(例)

- ・日記を書く
- ・地図で地名を調べる
- ・伝記を読む
- ・図鑑を見てノートに絵や情報をかく
- ・新聞記事をまとめる
- ・ローマ字で自分や友だちの名前を書く
- ・工作をする
- ・漢字・算数ドリルに取り組む
- ・辞書で慣用句を調べる
- ・リコーダーの練習をする
- ・料理をして、レシピにまとめる
- ・授業で書いたノートを自主学習ノートにまとめる

家庭学習への取り組みせ方 や お子さんへの関わり方

1

最初に 宿題

まずは学校の宿題から取り組みせましょう。
宿題を確認することで、学校で今、どんなことをしているのか知ることができます。

2

次に 自主学習

自主学習って「何を」すればいいの？

～課題が決まらないときは～

お子さんの興味があることや、苦手を克服したいと思っていることを
お子さんに聞いてみましょう。それが**自主学習の課題**になることもあります。

自分の課題を解決するためには 「どう」すればいいの？

課題に向けて、どんな**方法**で取り組むとよいかなど、
はじめのうちは、一緒に考えてあげましょう。

いつ？

どこで？

どのくらいの
時間が目安？

低学年
…10～30分
中学年
…30～50分
高学年
…50～70分

3

取り組んでいる様子 を 見ましょう

そばにいたり励ましの声かけは、お子さんの意識を前向きにします。
低学年の時は特に大事ですが、中・高学年のお子さんにも必要なことです。

4

できあがったものに目を通し がんばり を ほめましょう

がんばって取り組んだものには、お子さんの**学びの足あと**があります。
「なるほどね」とうなずいたり、「～ができたんだね」などとほめたりしましょう。
また、その中には間違いもあるかもしれません。
間違いにも気づかせ、時にはアドバイスすることも大切です。
家庭学習への意欲や質が高まります。

お子さんの学習の様子を
見守っていきましょう

学力・体力を身に付けるには、基本的な生活習慣を身に付けさせることが大切です！

家庭で温かくお子さんを見守り、教え、一緒に学び、
毎日元気に学校生活を送ることができるようにしましょう。

生活習慣を大切に

規則正しい生活リズムを身に付けさせましょう

1日の時間の管理

睡眠時間や家庭学習に取り組む時間、遊ぶ時間、家族の会話の時間など、1日の計画を立てて過ごせるようにしましょう。

早寝・早起き

睡眠時間を十分に確保することが大切です。お子さんが、遅くまでテレビを見ていることのないように気をつけましょう。

朝ごはん

朝ごはんを摂ると、内臓が動き、排泄も促され、1日の生活のリズムが整います。

※ 毎日朝食を食べている子どもの方が、全国学力状況調査においても正答率が高い傾向にあります。

日々を豊かに

あいさつ

大人が率先して挨拶をしましょう。

対話

学校での出来事を話題にして、お子さんの様子を把握しましょう。

体を動かす

体を動かして遊んだり運動したりすることを進めましょう。体力がつくだけでなく、体の機能を高めることができます。

手伝い

お子さんの年齢に合わせて家族の一員として、家の手伝いをさせましょう。

家族と過ごす

家族と一緒に過ごす時間を大切にしましょう。

整理整頓

学習や遊びの道具、衣服などの整理整頓ができるようにお子さんに声をかけましょう。

地域の行事

地域の一員として、地域の行事に進んで参加するように勧めましょう。

体験のチャンス

様々な体験は、心を豊かにし、次への意欲を育てます。実感を伴った理解を深めることにもつながります。

学習環境を豊かに

学習する雰囲気をつくりましょう。

机の上の片付け

机の上を整えて、家庭学習に取り組むようにさせましょう。

読書

様々な本を手にする機会をつくりましょう。読書好きは、学び上手になります。

テレビは消して

学習時間になったらテレビを消して、集中して学習できる環境にすることが大切です。

声かけ

宿題は出ているのか、自主学習は何に取り組むのか、声をかけて確認しましょう。

次の日の支度

翌日の学習の準備をさせ、確認しましょう。

いっぱいあそんで いっぱいおはなししよう

資料3

子どもの周りには、ドキドキ ワクワクがいっぱいあります。
今しか感じられないものに寄り添いながら
自然や文化、人や社会とかかわる姿を温かく見守ってください。



子どもの“これなあに？・なんで？”は
あたりまえのようだけど その先に学びがあります

子どもの学びを見つめる

入学前に「～ができないと、いけないのだろうか?」と不安になることもあると思います。保護者の皆さんに大切にしていきたいことは、“できるか できないか”ではなく、お子さんが様々ななかかわりの中で見付けた“楽しさ”や“ふしぎ”などに寄り添うことです。

大人から見ると、ぐちゃぐちゃに見えるもの…例えば、ぐるぐるとだけ描かれた絵や無造作に積み重ねられたかのような箱…そういったものにも、その子なりの意味や価値があります。

お子さんが、何を見て、何を感じているのか…きっとそこには、大人には味わえない子どもなりの発見や驚きなどといった学びがあります。そういった 実体験 や 感覚 が学校教育での学びのスタートとなります。

ここに示したポイントは、4月からはじまる学校生活のためだけでなく、お子さんの 心と体の健やかな成長のためにも大切なものです。

子どもは毎日の 小さな 小さな 積み重ねによって、少しずつ、それでも確かに成長しています。今日に 至るまでも 小さな「できた!」をお子さんと喜び合いながら過ごされていると思います。

時に「何で、できないの!」「早くして!」と ついイライラしてしまうこともあります。そんな時は息を一つはいて、今は成長の過程であると、ゆったりお子さんを見つめてみてください。そこには小さな学びのきっかけが、きっとあるはずです。

お子さんとのかかわりのヒントとして…



たくさん遊ぼう

様々な遊びを通して、体の諸機能の調整力が大きく育ちます。スポーツだけでなく、散歩や手伝いなど、**様々な動き**をすることも大切です。遊びによって様々なものに出会うことで心も体も成長させ、豊かな情操を培います。

たくさんお話をしよう

日常の出来事を家庭で話し合うことは、子どもの心の安定を生みます。

また、大人とダジャレやしりとりなどの**言葉遊び**をすることも、子どもの学ぶ気持ちを育てます。気軽に組みんでみましょう。

本に親しもう(読み聞かせなど)

絵本などの読み聞かせは、とても大切です。

- ① **新しい世界**を知ります。
- ② **新しい言葉**を学びます。
- ③ **集中して**話を聞けるようになります。

読み聞かせは、知的好奇心を刺激するだけでなく、心のふれあいを生む時間にもなります。

「早寝早起き朝ごはん」って大切

朝食は一日の元気の源になります。朝食をとらないことは無気力や疲れやすさにつながります。朝食はしっかりと食べさせましょう。

また、睡眠時間を十分に確保することが大切です。5歳から7歳くらいに必要な睡眠時間は、およそ10時間半～11時間です。

「自分でやる!」を見守る

同じことやできることの繰り返しのの中では、その子らしさを伸ばすことはできません。お子さんがいろいろなことに**チャレンジする機会**をつくり、その様子を見守りましょう。

また、幼児であっても、1年生であっても、家族の一員として**様々な役割**を担うことが大切です。

「お片付け」の大切さや楽しさの共有

片付けは後始末だけでなく、次への準備でもあります。準備は**学習の基礎**です。小学校では、自分の道具は自分で管理します。

○後片付け

遊びの道具・衣服などを整理整頓する気持ちよさを、お子さんも感じられるようにかかわりましょう。

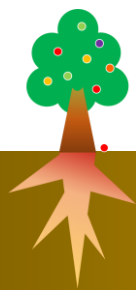
○次の日の準備

誰でも最初は、自分一人で準備をするのは難しいので、おうちの人が確認をしましょう。

そして、少しずつできることが増えていくようにお子さんを温かく見守りましょう。

「あいさつ」…人と人をつなげる言葉

「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」「いただきます」「ごちそうさま」「おやすみなさい」「ありがとう」「ごめんなさい」といった**挨拶・返事・感謝等の言葉**は、人と人とのつながりを豊かにします。



学校が地域の中の学校であり続けること

～地域と共に創る学校 地域に愛される学校 地域を愛する子どもを育む学校～



鴨居小学校 学校運営協議会の委員や地域の方に地域の魅力をインタビューする総合的な学習の時間（第6学年）の様子



常葉中学校ブロックの学校運営協議会委員が参加した小中一貫に関する日（田戸小 体育館）の様子

日頃より学校運営協議会に係る様々なお取組に御礼申し上げます。

本紙は、令和4年度から横須賀市内全学校に設置された学校運営協議会をより充実した組織にしていくために発行しているものです。

今回は、浦賀行政センターとの連携や、田戸小学校で取り組まれているコーディネータの事例を紹介しながら、今後の本市学校運営協議会の在り方について、皆様と考えていきたいと思います。

様々な学校から「学校運営協議会で話し合ったことを実現するためにも地域と学校をつなぐコーディネーターのような方がいれば…」というようなご意見をいただくことが多くなってきました。

そこで、浦賀中・浦賀小・高坂小・鴨居小で学校運営協議会委員を務めながらこれまで様々な地域と学校をつなぐ活動（コーディネート）をされてきた浦賀行政センター館長の和田明さんと、浦賀行政センター地域コミュニティ職員として地域と学校をつなげる役割（コーディネーター）を担当している今津陽菜さんにお話を伺いました。

浦賀行政センター和田館長と今津さんに聞く 浦賀・鴨居地区の学校運営協議会



地域の思いと 学校の思いをつなぐ

行政センターだからできること

渡辺（市教委担当）／和田館長は、様々な学校で学校運営協議会の委員をされていますが、協議会の際に意識されていることはありますか。

和田館長／学校の困りごとの相談・解決のために、何ができるかを常に考えています。特に地域と学校の間に入ることができるので、自分たちの持っている情報の中で役所のルール範囲内で伝えられる情報はできる限り伝えようと思って参加しています。

渡辺／これまでの学校との関わりの中で、心に残っているエピソードはありますか。

和田館長／一番インパクトがあったのは、担任の先生の困り事を一緒に解決できたことです。ある学校で、家がゴミ屋敷のようになっている家庭のお子さんが通学できないことを聞いて、私は生活の支援の立場で担任の先生と一緒に家庭訪問をしたことがありました。少しだけですが、担任の先生のお手伝いできて、その子も学校行事に参加することができました。

渡辺／よく子どもたちの学習のゲストティーチャーとして和田館長をお見かけしていたのですが、そのような活動もされているのですね。

和田館長／むしろ、行政センターはそういう福祉や民生の方が得意なんです。学校運営協議会の委員になって、学校に信頼してもらえるようになり、そういうネガティブなことも相談してもらえたので、解決のために動くことができました。

渡辺／今津さんは、この仕事をされて2年目と聞いていますが、最初にこの地域と学校をつなぐコーディネーターを任されて、その仕事のイメージはもてましたか？

今津さん／正直、全くイメージできませんでした。こんな仕事もあるのかと…。でも、学校運営協議会にオブザーバーとして参加させてもらったり、実際に活動したりしていくうちに、地域と学校の間に行政センターが入ってできることってたくさんあるなと思いました。

渡辺／これまでの2年間の活動で印象に残っていることはありますか？

今津さん／昨年度、浦賀小学校の6年生が地域に子育て支援施設がないことを地域の課題と捉えて、行政センターの空きスペースを使い、赤ちゃんやお母さんが集える「愛らんど浦賀」をつくるという取組をしたのですが、そのお手伝いをしたことです。

渡辺／それ、私も見学に行きました。子どもたちが細部までこだわって赤ちゃんや

お母さんたちがくつろげるスペースをつくっていましたよね。



浦賀行政センター2階に完成した「愛らんど浦賀」
(令和5年12月)

今津さん／子どもたちの考えを実現できるように、お手伝いできたのはとても楽しかったです。

コーディネーターとしての意識

渡辺／コーディネーターとして活動する時に大切にしていることは何ですか？

今津さん／私は子どもに感覚が近いので、子どもの気持ちになって考えたり、ちょっとだけアドバイスしたりしています。ちょっとつけ足すとよいことや、足りないことを私の存在で埋めていきたいです。

和田館長／子育て支援のスペースは、子どもたちのアイデアを採用して今年度、実際に行政センターの中につくりました。

今津さん／子育て支援スペースをつくる時には、子どもたちに来てもらって、あるとよいものや、レイアウトも一緒に考えました。放課後に「今津さん、遊びにきたよ」と来てくれる子もいて、嬉しいですね。

渡辺／逆に、今の活動について改善点はありますか。

今津さん／浦賀地区は先生方にも行政センターがコーディネーターとしての仕事をしていることを知ってもらっているのですが、まだまだ学校に知られていないのかなと感じることはあります。もっと助けられることはあると感じていますが、先生方が私たちの存在を知らないのかもしれないと思うことはあります。

和田館長／うまくいかないこともたくさんありました。教育の話は、地域の人も保護者も分かりづらいことがあります。そのため、話し合いの最初は、地域の思いと学校の思いに大きなズレがあることがある。その、お互いの思いを聞き取って、何度も顔を合わせて話し合っていくと、だんだんとその溝が埋まってくる。そのズレを埋めるのが私たちの役目なのかなと思います。

今後の抱負は？

今津さん／私以外にも4人の職員が地域と学校のコーディネートを担当しています（右上の写真）。このような活動が市内全体に広がって、それぞれが助け合ってよい地域にしていければと思います。

和田館長／学校は子どもたちのために授業に集中してほしいと思っています。だから学校の稼業時間もしっかり守りたいです。その分、地域のことは私たちに任せてほしい。いろいろな引出しをもっています。様々な方や企業、市役所の部署につなげることもできます。学校運営協議会の委員を探している時もぜひ相談してほしいです。



浦賀行政センター地域コミュニティ係のみなさん
（令和6年12月4日撮影：「プレイルーム」前にて）



「愛らんど浦賀」の現在の活用について和田館長から紹介していただきました。

今年度、「スクールコミュニティ」事業を所管する地域コミュニティ支援課と学校を中心とした地域コミュニティの在り方について協議を重ねてきました。

当初の学校に地域の人の居場所をつくるという考え方から、地域と学校の連携による人と人との「つながり」をつくることこそが大切であり、そのための支援を行う事業なのだというのを改めて整理し確認しました。地域によっては行政センターだけでなく、これまでも地域と学校のコーディネートを行ってきた方や団体があります。今後は学校運営協議会と連携・協働することで学校にとっても地域にとってもよりよい関わりが生まれてくるのではないのでしょうか。

田戸小学校は今年度から学校運営協議会で協議したことを実際の教育活動に結びつけていくために、学校独自で地域と学校の活動をコーディネートするお仕事を地域の方に委嘱しました。

田戸小学校でそのコーディネーターをされている吉田恵子さんとコーディネーターを立ち上げるアイデアを立案した教頭の瀧澤和人先生にお話を伺いました。



田戸小学校の新たな取組

地域とつながり続けていくために

地域コーディネーターという役割

渡辺（市教委担当）／なぜ田戸小学校は、今年度から、地域とのコーディネーター役を吉田さんに依頼されたのですか。

瀧澤教頭／教員や管理職は毎年のように移動があります。地域とのつながりの強い教員や管理職がいる時は良いけれど、その人が居なくなると地域と学校の活動が無くなるということでは、持続可能なものにならないと思いました。地域をよく知っている方に委嘱したら、地域の人やものを紹介

していただけることもできますし、学校との活動の引継ぎもスムーズになると思ったからです。

渡辺／なぜ、コーディネーターを吉田さんをお願いしようと思ったのですか。

瀧澤教頭／吉田さんは、これまで学校施設開放委員会の代表をしてくれていました。その時から学校側の目線に立って、地域の方とお話をしてくださる方だと感じていたからです。

渡辺／吉田さんは、このお仕事を依頼されて半年ほどになりますが、いかがですか。

吉田さん／全くと言ってもいいのですが…まだまだです。今は、瀧澤先生に勧められて神奈川県生涯学習課が主催している生涯学習指導者研修「学校と地域との協働推進コース」に参加して学んでいます。その研修は、年間4回あって、他地区のコーディネーターさんのお話を聞いたり、地域の人とのつながり方や子どもとのつながり方などについて学んだりしています。

渡辺／最初から全てを理解して、コーディネーターできる人はいませんかね。学び続けていくことも大切ですよ。その中でも、この半年で何か成果を感じられるようなことはありますか。

吉田さん／今年から教室に入れない子や不登校傾向のある子のために「ほっとすルーム」という居場所が学校の中にできました。その場所で子どもたちを見守ってくださるボランティアを地域の方の中から探してことができました。ただ、子どもの安心や安全に関わることなので、誰でも良いというわけではありません。誰に依頼していくのかという人選が難しかったです。

瀧澤教頭／「ほっとすルーム」は常葉中学校にもあるもので田戸小学校にもつくって

みたのですが常に大人がいられるわけではないので助かりました。



田戸小の「ほっとすルーム」 児童手づくりの看板



田戸小の「ほっとすルーム」の様子

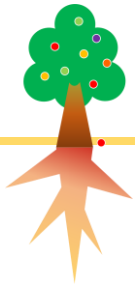
教室とは思えないような空間にしたいとのこと。今後どのように活用されるか楽しみになった。

渡辺／瀧澤先生は、神奈川県教育委員会の生涯学習課で地域学校協働活動の推進などを担当されていたと伺っていますが、どのような方がコーディネーターに向いているのでしょうか。

瀧澤教頭／学校に入って何かをしたいと思う人はたくさんいると思いますが、学校の立場を尊重して慎重に物事を進めてくれる人だと思います。学校も限られた時間と人材の中で運営しているので、学校の課題を共有して、学校と地域がゆるやかにつながれるようになるといいなと思います。

今後の抱負は？

吉田さん／今年はできなかったのですが、地域と学校で進めている総合的な学習の時間のゲストティーチャーとは自分もつながっていきたいですし、地域の中に子どもたちが学習で出かける時には先生方に同伴して、地域の方と積極的につながっていきたいです。他の学校にもコーディネーターができれば、その方たちとも情報交換してよい事例を取り入れていきたいです。

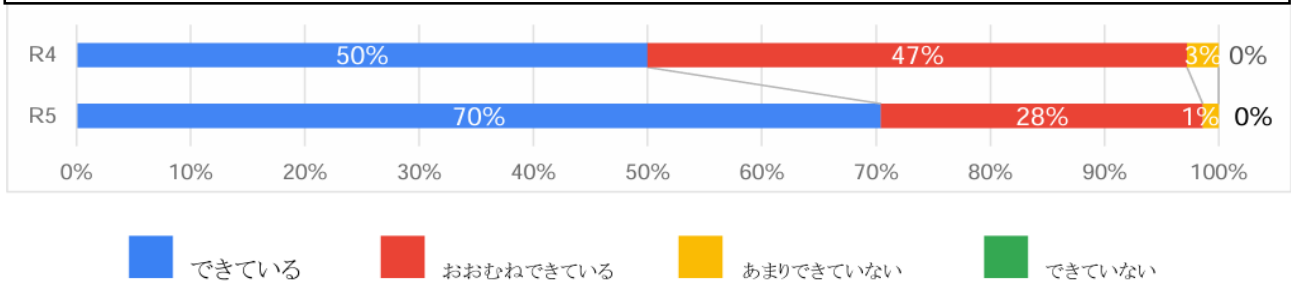


学校運営協議会アンケートから 現状と今後の展望を考える

学校運営協議会の推進状況を把握するために、毎年アンケート調査を行っています。回答数は令和4年度 委員326名、令和5年度 委員315名、学校は全ての学校長に回答をいただきました。アンケート結果も蓄積されてきましたので、特長的な結果をいくつかご紹介します。

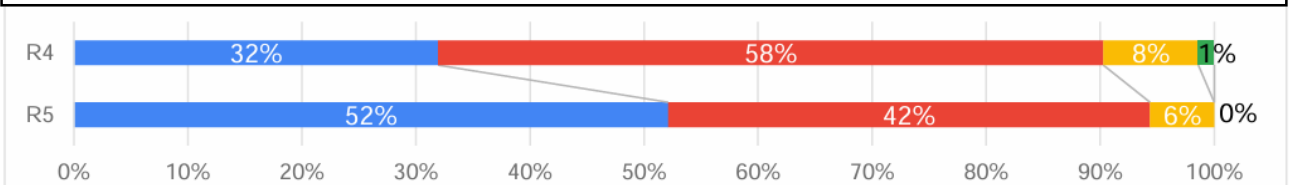
学校長アンケート

協議会では、学校教育目標や学校として育てたい子ども像、学校運営のビジョンなどが共有されている。



学校長のアンケート結果は、ほぼ全ての回答で、肯定回答の上昇が見られました。中でも目標の共有に関する質問は「できている」の上昇値が最も大きかったものです。学校長が、学校運営協議会の理念や進め方についての理解が深まり、熟議したことを学校運営につなげていくビジョンがもてるようになった結果だと考えられます。

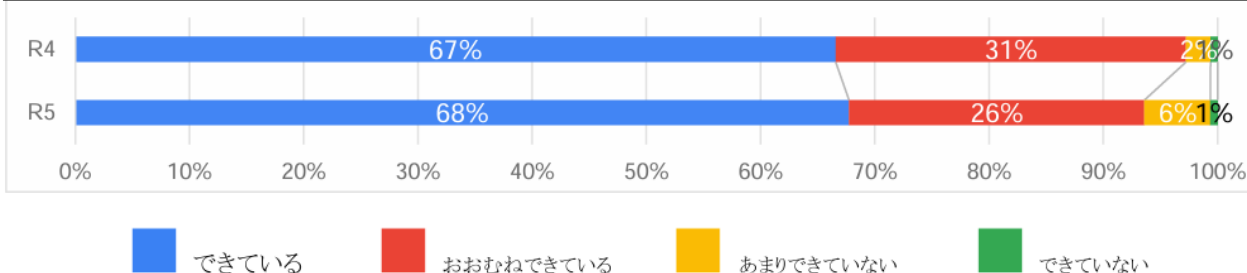
学校の問題や悩みは、協議会委員の中で共有されている。



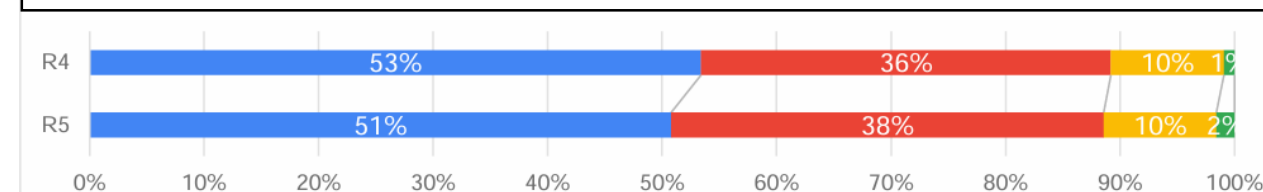
この結果は、学校の問題や悩みなど踏み込んだ内容についても熟議ができるようになった結果であると考えられます。また「協議会内は忌憚なく意見を出し合える雰囲気がある」という結果についても肯定的な回答は100%に近い結果でした。委員と学校が普段から何でも相談できる関係になってきていると感じます。

委員アンケート

協議会では、質問①（学校教育目標等の実現）に向けて、具体的な取組や支援について協議している。



協議会で議論したことによって、学校や地域の具体的な取組につながることもある。



委員アンケートの結果からは『具体的な取組や支援』についての2つの質問を抽出しました。具体的な取組について協議する結果は90%を超え、協議の結果から具体的な取組につながったことがあるという回答も90%近い結果になっています。学校運営協議会設置3年目の結果としては、とても高い数値であると感じます。

自分たちで話し合ったことが実現したという経験は、学校運営協議会委員としての自信やモチベーションにつながります。学校運営協議会では、学校教育目標の実現に向けた具体的な取組のアイデアを出し合うだけでなく、それらをランキングしたり、優先順位を考えるような熟議も考えられます。

これまで学校の教育活動は、地域の方や保護者がボランティアとして関わる場合、常に学校の担当者や教頭先生が窓口となってきました。しかし、学校運営協議会ができ、その役割や窓口を学校と地域もしくは行政が分担して担うような事例も増えてきています。今後も、学校教育目標の実現につながる『具体的な取組や支援』について熟議を重ねていってください。



船越小学校の2年生の生活科
「まちたんけん」は地域の方が今年から引率ボランティアとして参加しています。

アンケート結果について

全てのアンケート結果については後日、学校長を通じて、委員の皆様へ送付させていただく予定です。この結果を見ながら、委員の皆様で語り合うことも学校運営協議会をよりよくしていくための熟議となり得ます。ぜひお時間のある時にご覧ください。

学校運営協議会オンデマンド研修動画

今年の6月に、横須賀市で目指す学校運営協議会の理念や目標、学校運営協議会委員の皆様にごどのような働きや協議会の運営を行っていただきたいかなど、学校運営協議会の基本的な内容について多くの方に知っていただくために、オンデマンド研修資料を作成しました。



横須賀市教育委員会教育指導課
チャンネルアイコン

●右のQRコードを読み取るとオンデマンド画面に移動できます。
You Tubeの検索画面で「横須賀市教育委員会教育指導課」
(URL https://www.youtube.com/channel/UC6J-uTJ5stA1D_XLtt8_Wqg)
を検索してもチャンネル画面に移動することもできます。



●動画の時間は33分です。
スライド資料を動画にしています。途中スライド資料の文字等が見えにくい場合は、画面を一時停止するなどしてご対応ください。

学校運営協議会設置3年目を振り返って

横須賀市で学校運営協議会が設置され、3年が経とうとしています。

市内のある小学校では、総合的な学習の時間の中で地域の方と交流するイベントを企画しました。子どもたちは、学校運営協議会の人たちに自分たちの考えをプレゼンして企画を実施・成功させることができました。活動を振り返り、ある子が言った

「大人になったら学校運営協議会の委員になって、この活動をつなげていきたい」という言葉が今でも忘れられません。

今、目の前に3年間の明確な成果が見えなくても、この学校運営協議会の仕組みがある限り、地域と学校の支えの元で子どもたちは育ちます。そして、地域や学校を愛する気持ちがゆっくりと醸成されていくのではないかと思います。もしかすると、子どもたちが大人になった時に表れてくるような成果も中にはあるのかもしれません。

この3年間で「もう3年…」と捉えるか「まだまだ3年…」と捉えるのか、皆さんはどちらでしょうか。



編集後記にあたり、日頃から学校運営協議会委員として地域の子どもたちへ惜しみなく愛情を注いでくださる皆様へ心から感謝申し上げます。今後も学校運営協議会は続いています。情報交換会やこの「学校運営協議会だより」から、市内の事例や理念を共有し、充実した教育環境を築く一助となれば幸いです。引き続き力を合わせ、横須賀の子どもたちの未来を支えていく学校運営協議会をつくっていきましょう。